

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

王直

王直は、中国徽州(安徽省)生まれの商人で、明王朝が海禁政策を行う中、日本や東南アジアを相手とした密貿易に従事して財を蓄え、明政府から倭寇の頭目と見なされた人物です。

明政府の海禁政策とは、江戸時代の鎖国政策と似たようなもので、民間勢力が海を越えて私的に対外交渉や貿易をすることを制限すること。海賊や密貿易行為を防止するのが目的です。王直は当初、双嶼(浙江省)の港を拠点に活動していました。しかし、嘉靖27(1548)年に浙江巡撫(地方長官)の朱纨による取り締まりと攻撃を受けて、東シナ海を渡った先にある長崎県西部の五島や平戸などにも拠点を移しながら活動しました。

嘉靖35(56)年9月、明の浙直総督となった胡宗憲は、大明副使の蔣洲を日本に派遣します。蔣洲は、まず五島で王直と交渉。その後、豊後に向かつて大友義鎮(宗麟)に面会し、倭寇の取り締まりを要請します。周防山口の大内義長の元にも使者を派遣して、倭寇禁制の発布を求めました。翌嘉靖36(57)年になると、胡宗憲は、東シナ海をまたいで活動する倭寇集団の中国側最大の首領となっていた王直を帰順させる政策を打ち出します。今

後は海禁政策を緩めて他国との私貿易を許可するとし、さらに、王直が中国に戻れば従前の密貿易の罪を許すとも伝えたので

胡宗憲から海禁の緩和を伝え聞いた王直は早速、豊後の大友義鎮と山口の大内義長に連絡しました。互市(自由貿易)の許可を知った大友義鎮は、早々に巨船を建造して使僧善妙ら40人余りを乗船させ、彼らは帰国する王直に随行して浙江省舟山島の岑港に入港します。

ところが、許可されて帰国したはずの王直が、明政府によって捕縛されてしまいます。その

自由貿易を求めた中国人倭寇



王直が拠点とした双嶼の港(中国浙江省)

ため、大友船団の乗組員と王直配下の倭寇たちは港に防柵を並べて立てこもり、明官軍との間で「岑港の戦い」が始まりました。つまり、胡宗憲の呼びかけは、倭寇を懐柔して王直を捕らえる策略だったのです。投獄された王直は、その2年後の嘉靖38(59)年に処刑されたと記録されます。

ただし、王直は、単なる海賊ではありません。管理貿易体制を敷く国家と、自由貿易を求める民間とのせめぎ合いの中で、後者の道を求めて命を失った存在と言えます。そして王直没後の16世紀後半の東アジアの海では、日本や東南アジア諸国、それに西欧も加わった自由貿易が活発に展開するようになるのです。

(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)

11月1回掲載